

転換期の中国経済

「世界の工場」は今、
新たな成長モデルの育成を急ぐ。

株式会社ニッセイ基礎研究所 経済研究部
 上席研究員 三尾幸吉郎

安価で豊富な労働力で発展

文化大革命を終えて1978年に改革開放に乗り出した中国は、まずは生産責任制で農業改革を軌道に乗せた後、外国資本の導入を積極化して工業生産を伸ばし、その輸出で外貨を稼いだ。稼いだ外貨は主に生産効率改善に資するインフラ整備に回され、中国は世界でも有数の生産環境を整えていった。この優れた生産環境と安価で豊富な労働力を求めて、工場が世界から集まって中国は「世界の工場」と呼ばれるまでに発展した。

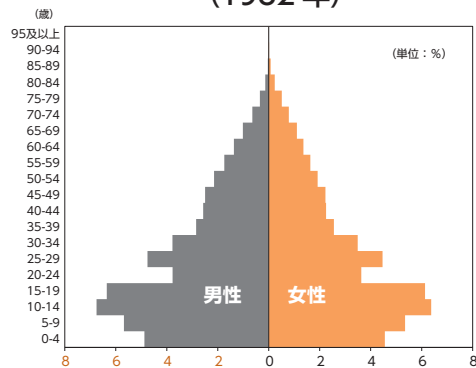
過剰設備・過剰債務が重荷に

改革開放直後の世界経済を概観すると、米国のGDPシェアは25.8%、現在のEUに当たる地域が34.2%、日本が9.8%と合計約7割を占める中で、中国は2.7%と存在感は小さかった。しかし、前述の成長モデルで成功した中国は徐々にシェアを高め、2017年には15.1%と世界第2位の経済大国へ成長、米国の約6割、日本の約2.4倍の規模となった(図表1)。また、過去5年のGDP増加額を見ると、中国は3.4兆ドルと米国の3.2兆ドルを上回るなど世界経済での存在感は飛躍的に高まってきた。

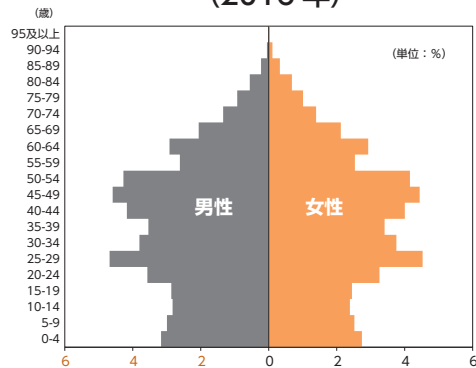
しかし、中国の安価で豊富な労働力には影が差し始めた。長らく続いた一人っ子政策の影響で13年をピークに生産年齢人口(15～64歳)は減少に転じた。人口構成を見ると、これから生産年齢人口になる14歳以下の人口が少なく、外れてくる60歳前後の人口が多いため、今後も生産年齢人口の減少傾向は続く見通しである(図表2)。

また、経済的な豊かさを示す1人当たりGDPを見ると、改革開放直後の中国は世界139カ国の中で下から14番目と貧しかったが、17年には世界188カ国の中で上から74番目とちょうど真ん中くらいの位置へ発展した。しかし、この世界の

図表2：中国の人口ピラミッド
(1982年)



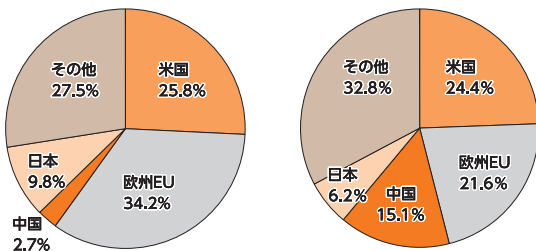
(2016年)



図表1：名目GDPシェア

(1980年)

(2017年)



資料：IMF

資料：CEIC (出所は中国国家统计局)